

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	乙	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 神谷 千津子

論文題目 Different Characteristics of Peripartum
Cardiomyopathy Between Patients Complicated
With and Without Hypertensive Disorders
— Results From the Japanese Nationwide
Survey of Peripartum Cardiomyopathy —

〔 高血圧症の有無により、周産期心筋症の臨床経過は異なる
— 周産期心筋症全国調査結果 — 〕

論文審査担当者 名古屋大学教授

主査 委員 神谷 香 一郎



名古屋大学教授

委員 員 山下 正



名古屋大学教授

委員 員 西 脇 公 俊



名古屋大学教授

指導教授 室原 豊明



論文審査の結果の要旨

周産期心筋症もしくは産褥心筋症は、健常な妊産褥婦が妊娠を契機に心機能低下をきたし、突然心不全を発症する原因不明の疾患であり、主な母体間接死亡原因に挙げられる重篤な疾患である。しかしながら、循環器科と産科の境界領域にある希少疾患であるために、疾患概念すら周知されていなかった。そこで本研究は、全国の産科、循環器科、救急科専門医認定施設 1444 病院を対象に、2007 から 2008 年に発症した周産期心筋症患者について、わが国初の症例調査を行い、102 例の登録を得、その臨床像、妊娠高血圧症候群と周産期心筋症の関連について詳細検討を行った。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. わが国における推定発症率は約 2 万分娩に 1 例であり、従来多産婦に多いとされていたが、少子化を反映して過半数が初産婦であった。
2. 危険因子として、高齢、妊娠関連高血圧症の合併(42%)、多胎妊娠(15%)、切迫早産に対する子宮収縮抑制剤の使用(14%)が挙げられ、欧米からの報告と一致した。
3. 息切れ、体重増加、浮腫などの心不全症状の多くが、正常妊婦も訴える症状であり、初診医のほとんどが産婦人科医であった。診断時の血清 BNP 値は平均 1,258pg/ml と著明に増加しており、専門医以外でも簡易に心不全診断できる有用な検査と考えられた。
4. 母体予後は、死亡 4%、左室補助装置を装着し心移植待機例が 2%、それ以外の退院症例における平均入院期間は 34.6 日であった。平均観察期間 10 カ月ののち、心機能が正常化した症例が 6 割、低心機能が残存した症例が 3 割であった。
5. 最大危険因子である妊娠関連高血圧症の有無でサブ解析したところ、診断時と退院時の左室径や左室収縮能、急性期母体死亡率に差がなかったにもかかわらず、最終観察時には、高血圧症を有した患者がより心収縮能が改善していた。
6. 多変量解析では、診断時の左室機能が良いほど、もしくは高血圧が合併していれば、入院日数が短く、慢性期の心機能回復度が大きいことが示された。
7. 以上から、危険因子を有する妊産褥婦に対して、周産期心筋症を念頭に置き診療を行っていけば早期診断につながることで、早期診断により、疾患予後改善が見込まれること、が考えられた。

本研究は、周産期心筋症の臨床像や、危険因子と疾患の関係を明らかにし、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。